チベット僧院での仏教研究法
――問答学習の特徴と効果について――

小 野 田 俊 蔵
（佛　教　大　学）

チベット僧院での問答学習は「ドゥラ bsdus grwa」と称される論理学綱要書を使って学習されるが，従来は二種の異なった誤解が存在していた。それは，この「ドゥラ」の学習の伝統が極めて後期に成立した，幼年僧に対する幼稚なものであるという誤解と，逆に，それはインド仏教論理学の単なる翻訳と抄出にすぎない，という誤解である。しかしこの二つの考えは両方とも事実誤認であって僧院教育の中でこの「ドゥラ」の学習が占める重要性は歴史的に見ても極めて大きいものであることが近年徐々に明らかにされてきた。問答学習は，初学者の思考能力の養成という観点から言っても，教育効果の点から概観してもけっして過小評価されるべきではない。問答による研究の過程で学習者は学習内容の要点にたいする正確な把握をなし，指導者の側からは学生の理解の程度を正確に摑むことが出来るという利点がある。また，論理用語や仏教術語の概念規定についてのこの時期の学習はその後の高度な仏教学研究のためには必須と言える。

チベットに於ける論理学あるいは論争学の伝統を考える上で重要と思われる歴史的なアウトラインを先ず述べてみたい。この領域に画期的な知見を切り開いた業績は，ファンダカイップ Leonard van der Kuijp 教授のものである。彼が1983年に出版した研究書 *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*（Alt-und Neu-Indische Studien

26）が果たした役割は極めて大きいものと言える。同書の記述の下敷きとなったのは，十五世紀に活躍したサキャ派の学僧シャーキャチョクデン Śākya mchog ldan 1428-1507によって著されたチベットに於ける仏教論理学の伝統に関する作品『論理学伝統史 *Tshad ma'i mdo dang bstan bcos kyi shing rta'i srol rnams ji ltar 'byung ba'i tshul gtam du bya ba nyin byed snang ba*』である。サキャ派に属する著者シャーキャチョクデンの立場を考えてみると，そこでサキャパンディタの正統性が強調されるのは当然ではあるが，しかしそこにはサキャパンディタ以前に隆盛したチャパ流の論争学とサパン流の論理学との観点の異なりもほぼ正確に記述されている。ファンダカイップ教授の研究以前にはゲルク派僧院での伝統の中に混在する異種の要素がどのような道筋でそこに至ったかについてゲルク派内部の文献を使って正確に把握することは出来なかったが，そこにひとつの研究方法が示唆されたのであるつまりサキャパンディタの『リクテル』及びその注釈書類を探索することによってその『リクテル』が想定する対論者たる所謂「チャパ流」の論争学の枠組みが類推できるのであり，この「チャパ流」の論争学がゲルク派の伝統に大きな影響を与えているのである。このファンダカイップ教授の後，多くの研究者がサキャ派の『リクテル』とその注釈書類の研究に従事した。デイヴィット・ジャクソン David Jackson 氏，トム・ティレマン Tom Tillemans 氏，ジョージ・ドレイフィス George Dreyfus 氏そして日本では福田洋一氏，小野田等によってチャパ流に対するサパン流の批判の内容が傍証されるようになってきた。[(1)] 歴史的な推移を極めて荒っぽく纏めると次のようになる。

１）ゴク翻訳官の伝統に連なる，つまりカダム派サンプ僧院の伝統のなかで研究されてきた彌勒の五法や『プラマーナヴィニシュチャヤ』を中心とした諸論書に基づいてチャパ・チューキセンゲ（1109-1169）が数々のサン

グラハを著し，その中，論理学の綱要書 *Tshad ma'i bsdus pa* からチャパ流の論争学が起った。

２）その後，シャーキャシュリーバドラが伝えた教えに基づいてサキャ派のサキャパンディタが『リクテル』の伝統を創始して正当性（つまり『量評釈』からの教証に準拠した論理学）を標榜してチャパ流の論争学を批判した。そこでは正確に言うとチャパ本人ではなく弟子のツァンナクパの説が批判される場合もある。

３）ゲルク派には両者の伝統が引き継がれた。つまり『量評釈』等，論理学書の研究ではサパン流の仏教論理学も採用されたが，初等教育では主としてサンプ流の論争学をその僧院教育の柱として取り入れ，思考力の養成が図られたのである。サンプ流の論争学は形を少々変えてサキャ派でも後代は採用され，さらに仏教のみならずボン教の僧院教育にも採用されるようになる。

論理学が，あるいは論争学が，はたして仏教の研究に属するのか，という疑問は旧くからチベットに存在したようだ。これについては，シュタインケルナー教授やファンダカイップ教授の研究を土台として我が国では木村誠司氏によってすでにすぐれた研究がある[(2)]が，要するに如何に真理を如実に捉えるかというのが仏教論理学であるという観点からその議論は出発しているはずである。ツォンカパ自身あるいは初期のゲルク派の学僧達は論理学を正当な仏教学と位置付ける立場であったとされるが，前述したチャパ流の論争学には，言い方はおかしいがその点ではたしてこれが真理の追求にどう繋がるのかと思われる課題もないではない。例えば，十五世紀後半にゲルク派の僧院教育の歴史に重要な役割を果たしたチョクラウセルは自著の中で，以下に説明する抽象概念の分類等が仏教文献の研究に直接は資さないけれども極めて重要である，という意味の文章を残している[(3)]。

さて，今回はそのような僧院内の論争学学習の実際を発表者が経験したままお伝えし，どのような問答を使って論理的思考が養成されていくのか，という問題を紹介したいと考える。

筆者はかつてチベットに於ける「答弁法」の変遷について一稿[(4)]を草したことがある。その折にも指摘したことではあるが，チャパ流の論争学とそれを批判したサパンの『リクテル』に説かれる論理学との間には，その目的ないし志向に大きな異なりがある。サパンの関心はあくまで能証の正誤についてであり，チャパの関心はあくまで論争に勝利することあるいは論争を通して培われる思考力の養成なのである。

今日の我々のようにメモをとったり，リファレンスを参照したりすることは許されないので，すべての知識は記憶され，思索の中で整合性をもって体系付けられねばならない。一つの概念はその定義によって外延が明確に規定され，他の概念との関係は一貫した検証法で確認されていなければならない。

さてチベット僧院の問答の中では，概念は具象概念と抽象概念とに区分され，その抽象概念はさらに，自己叙述的か非自己叙述的かによって細分される。この非自己叙述的（ヘテロロジカル）な概念はチャパ流の論争学の特徴をしめすものと言えるであろう。初学者用の問答の中でこれらの概念は頻繁に使われ，入門者を悩ますことになる。ヨンジンドゥラ［YDDG］で例とされる諸概念がいかに非自己叙述的なのかを考えながらそれらが実際の問答の中でどんな風に使われるかを見てみよう。

rang ma yin pa’i ldog chos（自己叙述的抽象概念）の例として［YDDG］があげる例は，mtshan nyid / tha dad / bum pa dang gcig / ka bum

gnyis，である。

先ず最初の例である mtshan　nyid（定義）にはその定義がある。その mtshan nyid（定義）の定義（mtshan nyid）は “rdzas yod chos gsum tshang ba” あるいは “rnam par ’jog byed chos gsum tshang ba” である[(5)]が，この “rdzas yod chos gsum tshang ba” なる定義によって「定義」は規定されるのであるから「mtshan nyid（定義）」は定義されるもの，すなわち所定義である。mtshon bya（所定義）にも “rtags yod chos gsum tshang ba” という定義があって，それによって規定される所定義であるから mtshon bya’ 自身は mtshon bya である。つまり，mtshon bya は自己叙述的であり，mtshan nyid は非自己叙述的と看做されるのである[(6)]。

次の例である tha dad はさらにその次の bum pa dang gcig で使われる gcig と共に最初期に学習される論理概念のひとつである。gcig は「単一」あるいは「同一」という意味を持ち，その定義は “so so ba ma yin pa’i chos”，tha dad は「多」あるいは「別異」という意味を持ち，その定義は “so so ba’i chos” である。つまり，gcig は単独の概念であるから gcig であると言え，自己叙述的であるが，tha dad 自身も単独なのであるから gcig であり tha dad ではない。つまり非自己叙述的なのである[(7)]。

またこの両者は dang という接続助辞を伴って～dang gcig（～と同一）～dang tha dad（～と別異）という意味をも表す。この名詞的な用法と述語形容詞的な用法とを同時に用いて初学者用の問答が作られている。多くの入門者が頭を悩せるのが，gcig dang gcig dang tha dad dang tha dad gnyis la khyad par ga re yod? という「gcig と同一（gcig gang gcig）」と「tha dad と別異（tha dad dang tha dad）」との関係（khyad par）を問う設問である。khyad par とは概念間の関係を言う。問答学習の中では概念間

の関係には4種あるとされる。つまり don gcig（同義）'gal ba（反対）mu gsum（三層交叉）そして mu bzhi（四層交叉）である。設問は "gcig dang gcig" と "tha dad dang tha dad" との間にどのような関係が存在するかというのである。

don gcig（同義）であることの条件は普通,「同義であるための8種の遍充関係 don gcig gi khyab pa sgo brgyad」で確認される。この場合, AとBとが同義であるということは, Aであるならばである。Bであるならばである。Aでないならばでない。Bでないならばでない。Aがあるならばがある。Bがあるならがある。Aがないならばがない。Bがないならがない。という8つである。

'gal ba（反対／矛盾）であることの条件は, "khyod tha dad kyang yin / khyod yin pa mi srid pa yang yin pa'i gzhi mthun du dmigs pa" かあるいは "zhi mthun mi srid pa yin pa" と規定される。つまり両者の間に gzhi mthun mi srid pa（共通項がない）かどうか, すなわちその両者が「有り得ないもの yin pa mi srid pa」であるかどうかが問題の中心となる。

mu gsum（三層交叉）とは片方が片方に遍充する関係である。何故三層交叉と言うかというと, 両者で無い層, 両方である層, 片一方であるが他方ではない層の三層があるからである。

mu bzhi（四層交叉）とは両者が相互に遍充しない関係である。何故四層交叉と言うかというと, 両者で無い層, 両方である層, 片一方であるが他方ではない層, そしてその逆の層, の四層があるからである。

今, 例えとして出した問答で言うと, 両者でないものは例えば「兎の角」である。両者すなわち gcig dang gcig でもあり tha dad dang tha dad でもあるものは「gcig」, tha dad dang tha dad ではあるが gcig dang gcig ではないものは例えば「壺 bum pa」である。gcig dang gcig ではあ

るが tha dad dang tha dad でないものは存在しない。何故なら gcig dang gcig というのは gcig 以外にはあり得ないからである。つまり，両者は mu gsum（三層交叉）ということになる。

gcig などの抽象概念どおしの組み合わせならまだ分かりやすいが，bum pa dang gcig のように抽象概念と具象概念との組み合わせを問答に持ち込まれると，初学者にとって思考力を維持するのが大変難しくなってくる。bum pa dang gcig は bum pa dang gcig ではない。bum pa dang tha dad である。bum pa dang gcig というのは「概念としての壺（bum pa'i ldog pa）」のことであって，壺と同一ではない。壺ではないからである。

さて，次の例の ka bum gnyis は yin pa mi srid pa'i chos（有り得ない存在）の例としてもっとも頻繁に使用される例である。直訳すると「柱と壺の両者 ka bum gnyis」となる。「柱と壺の両者」は存在するが，つまり存在物であるが，「柱と壺の両者」であるものなど存在しない。このようなものを「有り得ない存在」と称するのである。それ自体は存在するが，それであるものは存在しない。当然それは非自己叙述的な概念ということになる。

様々な内容の問答がこれを使って行われるがその中でも spyi と bye brag に関する問答が有名である。

spyi の定義は “rang gi gsal ba la rjes su 'gro bai chos” であるが，一般的な用語を使って訳すると「類」である。これに対して「種」に当たるものは，bye brag である。定義は “khyab byed du 'jug pa'i rang gi rigs yod pa can gyi chos” であるが，以下の問答を見ても分かるが，実際には spyi と bye brag の関係は，khyab byed と khyab bya の関係と理解され

ている。

さてこの様に考えると，spyi'i spyi（spyi の類）が bye brag gi bye brag（bye brag の種）であるためには bye brag は spyi'i spyi（spyi の類）の類でなければならない。このように相対的な関係をあらわす抽象概念どおしの遍充関係を吟味していくことによってその概念の外延が確認されていくのである。

さらに，前述の khyad par との組み合わせで ka bum gnyis と bum ka gnyis が don gcig（同義）と 'gal ba（反対／矛盾）の共通項であるとする問答もある。

以上，非自己叙述的な概念を使った初学者用の問答の一部を紹介してきた。指導者はこれらの非自己叙述的な概念を使って，検証なしには思考が次ぎの段階に進めないことを初学者に実感させ，予想を立てて思索することの危険性を自覚させるのである。

問答学習の指導者が最も心掛けねばならないのは，学習者自らに問題点を発見させる点である。ちなみに各学堂で学ばれる mtshan nyid は微妙に異なっているがそこには十分理由が存在する。普通タツァンの問答学習は 7 学期か 8 学期（chos thog）ある。学生はカムツァンからタツァンへ通いながら問答研究に励むがそれらの学期の合間に組み込まれている特別の学習期間つまり，サンプヤルチューやジャングンチューと呼ばれる他のタツァンや他の僧院，さらには時としてサキャ派等の他派の学僧との合同の問答集会もある。そこでは日々学習し研究してきた様々な概念の定義 mtshan nyid がぶつかり合い，そしてそれらの微妙な差異は白熱した議論を生み，新たな問題点の発見へと修行者を導くのである。

答弁は基本的に 3 種類しかない。学生には「分かりません」とはけっし

て言わせないで，質問者は討論者にその 3 つの判断のうちの一つを選ばせ，その発言に責任をもたせるのである。誤った判断の時は自らに誤りの再確認をさせる。

日々の学習に於いて，学生個々の進度に合わせて概念間の関係を問う質問やサンプルをさがさせる設問は用意されるが，指導者は決して解答を与えない。同じレヴェルの学生どおしは自らで試作した問答で疑問点を出し合いながら，何が当面の学習の要点であるかを自分の力で探っていくのである。

［定義一覧］

mtshan nyid（rdzas yod chos gsum tshang ba）［YDDGb : 9b4 ; KDKM : 638-3］（rnam par ’jog byed chos gsum tshang ba）［YDDGb : 10a2.］

mtshon bya（btags yod chos gsum tshang ba）［YDDGb : 9b3 ; KDKM : 638-2］（rnam par gzhag bya chos gsum tshang ba）［YDDGb : 10a1 ; TMDG : 484.］

gcig（so so ba ma yin pa’i chos）［YDDGa : 7b2 ; LPSP : 747-1 ; SNDG : 77 ; TMDG : 492.］

cf. so so ba ma yin pa tha mi dad kyi mtshan nyid dang / so so ba tha dad kyi mtshan nyid yin par / sde bdun yid kyi mun sel las gsungs ... ［RTDG : 166-2.］

tha dad（so so ba’i chos）［YDDGa : 7b2 ; SNDG : 79.］

’gal ba（khyod tha dad kyang yin / khyod yin pa mi srid pa yang yin pa’i gzhi mthun du dmigs pa）［YDDGb : 5a4 ; RTDG : 92-6］；（phan

tshun mi mthun par gnas pa）［RTDG : 92-5］；（tha dad gang zhig / gzhi mthun mi srid pa yin pa）［TMDG : 472.］

spyi（rang gi gsal ba la rjes su ’gro ba’i chos）［YDDGa : 20b5 ; SNDG : 126］；（khyab byed）［KDKM : 639-3］；（rang gi gsal ba du ma la rjes ’gro byed pa’i chos）［LPSP : 756-6］；（du ma la rjes su ’gro ba’i chos）［LPSP : 757-5.］（rang gi gsal ba du ma la rjes ’gro byed pa ）［TMDG : 489.］
bye brag（khyab byed du ’jug pa’i rang gi rigs yod pa can gyi chos）［YDDGa : 21a4］；（khyab bya）［KDKM : 639-4］；（chos de dang bdag gcig tu ’brel / khyod ma yin zhing chos de yin pa du ma grub pa）［LPSP : 757-5 ; TMDG : 489.］

［KDKM］: *gTan tshig rig pa las byung ba’i ming gi grangs* by klong rdol bla ma ;
［LPSP］: *Legs par bshad pa* by ’jam dbyangs bzhad pa ;
［RTDG］: *Rwa stod bsdus grwa* by mchog lha ’od zer ;
［SNDG］: *Sras ngag dbang gi bsdus grwa* by ngag dbang bkra shis ;
［TMDG］: *Thun mong bsdus grwa* by dge ’dun blo bzang ;
［YDDGa］: *bsDus grwa rigs lam chung ngu* by yongs ’dzin phur lcog.

註記

(1) David P. Jackson, *The Entrance Gate for the Wise*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 17, 1987 ; Shunzo Onoda, *Monastic Debate in Tibet*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 27, 1992 ; Georges B. J。 Dreyfus, *Recognizing Reality*, State University of New York Press, 1997 ; Tom J. F. Tillemans, *Scripture, Logic, Language*,

Wisdom Publications, 1999, etc。

(2) 木村誠司「チベット仏教における論理学の位置付け」山口瑞鳳編『チベットの仏教と社会』春秋社，昭和61年。

(3) “rig pa rno ba ’khrul byed du byas pa las gzhung gi go ba sogs la yang mi phen pa’i ngag rgyun dang / ” ’Jam dbyangs Phyogs lha ’od zer, *Rwa sTod bsDus Grwa*, LTWA, Dharamsala, 1980, p. 68.

(4) Shunzo Onoda, *On the Tibetan Controversy Conderning the Various Ways of Replying to Prasaṅgas*, The Tibet Journal, vol. XIII, no. 2, 1988.

(5) この「定義」の定義 "rdzas yod chos gsum tshang ba” はチャパによるものである。チャパ以前では，ゴクローツァワやギャマルワが "mtshon bya rnam ’jog（所定義を規定するもの）” を「定義」の定義としていたが，チャパは「それでは単に「定義」という言葉の意味でしかない」という意味の批判をしたとシャーキャチョクデンは伝えている。（全集第10巻128a5）；また，一般にこの chos gsum（三点の検証）は "spyir mtshan nyid yin pa / rang gi mtshan gzhi’i steng du grub pa / mtshon bya gzhan gyi mtshan nyid min pa” と説明されるが，チャパ自身は，"rang ldog rdzas yod yin pa / don ldog gzhan du ma gyur pa / rang gi mtshan gzhi la grub pa” と説明していたと言う。（同128b1）

(6) ここには mention of the term と meaning of the term の混用がある。例えば，「日本語」は日本語であるが，「英語」は英語ではない。日本語である。つまり「日本語」は自己叙述的であるが，「英語」は非自己叙述的と言える。

(7) so so ba には形容詞としての「別々の」という意味と名詞としての「別々のもの」という意味との両者がある。つまり，単一と同一，多と別異，という二義性の混用によってこの説明が成り立っている。

［付記］ 本発表の前日に大正大学で行われた第48回日本西蔵学会学術大会の会場で東洋文庫の福田洋一先生から「ゲルク派論理学の実在論的解釈について」『東洋の思想と宗教』第17号（平成12年 3 月）と題する論文の抜き刷りを頂いた。Tillemans 氏や Dreyfus 氏そして吉水千鶴子氏が言う「穏健な普遍実在論（この私の拙稿で扱う spyi dang bye brag に大いに関係する）を例に取りながら「論理学の文法的側面」を論考したすぐれた論文である。そのあとがきで福田氏が書いているように，我々は「多くの学僧が詳細な論争をしながら検討を加えてきた」伝統を理解できるまで先ずは学ぶことが必要なのである。